



からしだね

2022年7月号
(582号)

キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

教皇フランシスコの一般謁見演説
「伝道の手、人生における意味と
ものごとの不確かな暗闇」

7月のガラスケースのみ言葉

7月のみ言葉についての解説

大人の日曜学校 5月22日 ヨハネ 14：26

みんなの談話室

病気と闘う？

佐木隆三『身分帳』をよむ

主日のミサの日程が変更されます

宝塚黙想の家からのお知らせ

今月の表紙の絵について

巻頭言

2022年5月25日一般謁見演説 老齡期についての連続講話 11.
伝道の書、人生における意味とものごとの不確かな暗闇
教皇フランシスコ

親愛なる兄弟姉妹のみなさん、おはようございます。

老齡期についての考察の中で——引き続き老齡期について考えていきます——、今日はコヘレトの言葉、または伝道の書ともいわれる、もう一つの聖書の中の大切な書について考えてみましょう。一読すると、この短いコヘレトの言葉は印象的で、次の有名な繰り返される言葉は、読む人を当惑させます。「すべては空しい」。このすべては空しいという言葉は繰り返し使われます。すべては空しく、すべては「もやで覆われ」、すべては「実質がなく」、すべては「空虚」である、と。聖書で、存在の意味を疑問視する表現を見つけるのは驚くべきことです。実際には、コヘレトの感覚と無感覚の間で揺れる一連の動揺は、神の裁きが保障する正義に対する熱い思いから切り離された人生の気づきへの皮肉となっています。そして、コヘレトの言葉の終わりには、この試練から抜け出す方法を指し示しています。「神を畏れ、その戒めを守れ」(12・13)。これが、問題解決のためのアドバイスです。

すべての対立するものに便宜をはかるように見える現実、つまり、すべての人にとって同じ運命が待ち受けている——結局のところ無に行き着く——ように見える現実を前にして、無関心でいることは、痛みを伴う幻滅を乗り越える唯一の方法のようにも思えます。次のような疑問がわたしたちの中に生まれます。わたしたちの努力は世界を変えたのか？公正と不公正の違いを立証できる人はいるのか？すべては無駄なことのように見える……。なぜそんなに努力をするのか？

人生のどの時期にでも、ネガティブな直観というものが現れます。しかし、高齡になると、幻滅する経験はほぼ避けがたいものとなることは疑いの余地がありません。幻滅の経験は、高齡期にやって来ます。この幻滅による自信喪失への高齡者の抵抗は、決定的なものです。この時までにはそれを経験してきた高齡者が、正義への情熱を保ち続けるなら、愛と信仰への希望があります。そして、現代の世界にとって、このような危機を、健全な危機を乗り越えることは重大なことになりました。なぜでしょう？なぜなら、あえてすべてを比べて、すべてを操作する文化もまた、意味の喪失、愛の喪失、善の喪失を集团的に生み出すことになるからです。

この喪失は、行動する意思を奪います。この世のことに注目することだけに限定した「真理」とされるものは、また、対立するものへの無関心を意味し、解放しようともせずに、時の流れや無の運命に委ねてしまいます。このようなかたち——科学の罠に覆い隠されるだけでなく、非常に無神経で、非常に道徳の観念のないかたち——で、現代の真理への探究は、正義への情熱に別れを告げるように惑わされてしまいました。もはや、その運命、約束、あがないを信じてはいません。

実際のところ、すべてをものごとの正確な知識に委ねたいとする、現代の文化には、この新たな皮肉な思考の出現——知識と無責任を結び付けるもの——は、厳しい影響を与えます。実際、道徳規範からわたしたちを免除する知識

は、最初は自由や活力の源のように見えますが、すぐに魂の麻痺状態へと変わって行くのです。

この皮肉を持って、コヘレトはすでに意志の無気力さを生み出す知識の全能性——「全知の精神錯乱」——の誘惑の正体を暴いたのです。最古のキリスト教の伝統の修道者たちは、まさにこの魂の病を突き止めていたのです。それは、信仰や道徳規範のない知識の空しさ、正義のない真理の幻想を突然見出してしまうという病です。彼らはそれを「怠惰」と呼びました。これはすべての人、高齢者にとって誘惑です。すべての人にとっての誘惑です。単に怠惰なのではありません、それ以上のものです。単なる無気力でもありません。むしろ、怠惰は、正義とその結果としての行動への情熱を欠いたこの世の知識に屈したという意味です。

いかなる倫理的責任も真の善に対する愛情も拒絶するこの知識による無意味さや力の無さは、害がないとはいえません。善を求める力を奪うだけでなく、逆の反応として、悪の力の攻撃性へと扉を開いてしまうのです。これらは、イデオロギーの行き過ぎによって、暴走し、冷笑的になった理性の力です。実際、わたしたちの発展と繁栄がありながら、わたしたちは「疲労の社会」となってしまいました。考えてみてください。わたしたちは疲労の社会なのです。わたしたちは広く幸福を生み出したとされてきましたが、健康に関して、科学的に選択的な市場を黙認しているのです。平和のために越えられない基準をつくったとされてきましたが、無防備な人々に対する無慈悲な戦争がますます増えています。もちろん、科学の発展はよいことです。けれども、いのちの知恵は完全に別のものであり、行き詰まっているように見えます。

最後に、感情的で、無責任な理性も、真理を知ることから意味と活力を奪います。わたしたちの時代が、フェイクニュース、集団的迷信、偽物の科学的真実の時代であることは偶然の一致ではありません。知識の文化、すべてを知る文化、知識の正確さの文化でさえあるのに、多くの魔術、文化的魔術がはびこっていることは興味深いことです。ある種の文化を持つ魔術ですが、それは迷信の生き方へと導きます。一方で、ものごとを根本まで突き詰める知識とともに前進していますが、他方では、もっと別のものを求める魂が、迷信の道を行き、結果として魔術に行き着くのです。コヘレトの皮肉の混じった知恵から、高齢者は、正義への愛情を欠くこころの真理の錯乱状態に隠れた欺きに光をもたらすわざを学ぶことができます。知恵とユーモアに富む高齢者は、若者たちにとっても良い影響を与えます。高齢者たちは若者たちを、陰気でいのちの知恵に欠けた、この世の知識の誘惑から守るのです。そして、この高齢者たちはまた、若者たちをイエスの約束へと連れ戻します。「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる」（マタイ5・6）。高齢者たちこそが、若者たちの中に、正義への飢えと渴望を植え付けることができるのです。わたしたち高齢者は、勇気を持ちましょう。勇気を出して、前進しましょう。この世でとても大きな使命があるのです。けれども、どうか、このどこか具体的でなく、非現実的で、根拠のない理想主義に逃げ込まないでください——はつきりと言いましょ——いのちの魔術に逃げ込んではいけません。

7月のガラスケースのみ言葉

自分の貧しさを知る人は幸いである。天の国はその人のものだからである

マタイ 5章 3節

(福音宣教委員会撰)

7月のみ言葉についての解説

中村克徳 C.P.

現代社会に生きるわたしたちは、物質的な豊かさにあふれた毎日を過ごしています。夜遅い時間に小腹を満たしたいと思うなら、24時間営業のコンビニエンス・ストアやスーパーで買い求めることができますし、電化製品や書籍などの生活用品や趣味に関する物も、わざわざ店舗に行かずともインターネット通販で手軽に手に入れることができます。

そのような社会状況は、利便性の良い快適な生活を送るためには不可欠なものであり、もはや以前のような生活に後戻りするのは考えられないと思う人は多いでしょう。言い換えれば、欲するものを自分のものにするために、豊かな富を蓄えることこそが人生の目的であると割り切って考える人もおられるかも知れません。

しかしながら、人はこの世で永遠に生きることはできず、誰であっても人生の終焉の時がやってくるのです。唯物論的に考えるならば、そこですべては終わりとなります。それまで懸命に働いて積み上げたものは、あなた以外の誰かの手に渡ってしまうのです。人生とは、そのような結末で括られるものなのでしょうか？

イエス・キリストは、小高い丘に登って大勢の人々にたくさんの教えを説きました。今月のみことばは、その時に話された「幸いなるかな」で始まる真福八端という教えの最初に述べられたことばです。「自分の貧しさを知る人は」という言葉の原文を直訳すると、「霊において貧しい人は」という訳文になります。イエスの言う霊とは、人間の根幹に存在する、その人そのものを意味しています。それは神様の似姿として創られ、永遠に終わることのない命に生きる、尊いその人自身なのです。

その尊い存在が貧しくあれば幸いだとイエスは言います。それは物質的な欠乏だけではなく、神様以外に頼ることができないほどの困難な境遇に置かれた人を指しています。日々の生活に困窮し、神様が与えてくださった意図とは異なる、厳しく歪曲された律法の解釈を押し付けられ、神様に助けを祈り続けるしか生きる術がない人。そのような人は幸いであり、神様がお住まいになる天の国に入ることができる、イエスは言うのです。

この世での人生はいつか終わりを迎えます。しかしながら、その人は消滅することなく、神様がおられる天の国で永遠の幸福に生きることができるのです。いつかは手放さなければならぬ物質的な幸福を追い求めるよりも、周りの人を大切に、日々の生活で神様の助けを祈り求めるなら、神様はあなたという尊い存在を決して疎んじることはありません。イエスの教えに耳を傾け、永遠の命の恵みに希望をもってこの人生を歩んでいきましょう。

大人の日曜学校だより

5月22日 ヨハネ 14:26

福音：父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべての事を教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。

今回の大人の日曜学校の分かち合いは、当日のミサの中でのノノイ神父様のご講話の内容がきっかけで、「教えはイエス様が言った御言葉が最後であり、聖霊はイエス様の教えを私達に思い起させ教えて下さる役割だ」という事が明確に理解出来たと、皆で深め合う事が出来ました。

また、日常生活の中で『成る様になると天に任せた』や『何気に選んだ選択』な

ど、後で振り返ると、ああ、これはきっと聖霊が働いていたんだなあと気付くことがありますね。そのような皆さんの聖霊との心温まる体験談も、分かち合う事が出来ました。

聖霊はイエス様やマリア様と違って目に見えませんが、イエス様やマリア様よりもっと身近でいつも私達を見守って下さっているのだという気付きを今日は頂き、分かち合う事が出来ました。

わたしたちを見守り、イエス様の教えを思い起こさせてくださる聖霊に感謝。

研修委員会

みんなの談話室

病気と闘う？

T.K.

以前にも述べましたが、私には今のところ体に合う薬がありません。つまり病気が進行するまま身を任せるしかありません。病名が分かった当初は、何か合う薬があるはずと別の病院を訪ねてみようかとも思ったのですが、コロナの影響もあり、病院を渡り歩くことにも一寸戸惑いがありました。

お医者さんに見放されたような気がして落ち込み、私は鬱状態から解放されたくて

重苦しい気持ちと闘って来ました。闘えば闘うほど苦しい日々が一年半ぐらい続きました。その時は、この苦しさから一体いつ解放されるのだろう……と思うばかりで何も出来ず、神様に目を向けることも祈ることも出来ませんでした。私の信仰は一体何だったのだろうと何度も自問しました。

しかし、実は、その時にこそ主に守られていたのです。丁度あの「足跡」の詩にあるように、主が私を背負ってくださってい

て神様が見えなかったのかも知れません。しっかりと守られていた事に気付いた時、私は病氣と闘うのは止そうと思いました。このところ 毎日ロシアとウクライナの悲惨な映像を目の当たりにして、戦えば戦うほどさながら地獄の様相です。戦いを止めない限り酷くなるばかりです。その映像を見ながら自分の無力感も増すばかり。そんな画面を観ながら、ふと思いました。いつそのこと病氣と仲良くしてみよう！ それよりも病氣になったからこそ気付いたお恵みの多さに思いを馳せよう！

一体私はどれだけ沢山のお恵みをいただいているのでしょうか？ また、色々な方からどんなに多くの親切を受けているのでしょうか？ その事を考えていると自分が病氣であることをすっかり忘れてしまうのです。

小さな一例をあげると……二ヶ月ほど前から歩行車を使うことになりましたが、他人様が私の様子を見て「大変ですねえ」と声をかけてくださいます。確かに……いえいえ、歩行車があるお陰で教会にも来られますし、今流行りのチェアリングだって楽しめます。私の歩行車は優れものです。スーパーのかごも乗せられますし、疲れたら座る事だって可能です。池田駅から自宅に帰るまで(元気な時は10分) 疲れたら3、4回休むのですが、その間に人間ウォッチングやお花見をしたり、ちょこっと本を読んだり、友達に電話をしたり、何もせずにボーっとしたり、お祈りだって出来ます。病院が満員で座る場所が無くても

大丈夫。「どこでもチェア！」なのです。

歩行車と言えば、きっとあまり嬉しいイメージはないと思いますが、それを楽しめば喜びにも変わります。買えば5万円ですが、私は月々300円で借りています。医学的なことはよく分かりませんが、だんだん体のあちこちの筋肉が硬くなって動きが鈍くなり不自由さを感じます。しかし、体の機能の衰えを感じれば感じるほど、神様がいかに人間を精巧にお創りになったかということが分かり、感動せざるを得ません。ほんのちょっとした事にも神様の最高の知恵と技が込められている事を実際に体感しています。どんなに優秀な名医が手術をしても、神様がお創りになった通りに……なんて不可能な事です。

私は、ご聖体が最高の薬だと信じていただいています。今はおん血の拝領が出来ませんが、一日も早くおん血の拝領が出来ますようにと日々祈っています。私達が犯した罪のために流されたキリストのおん血を拝領することは、私にとってとても大切な事なのです。

どんな思いで一日を過ごすかは人によって様々だと思います。私は病氣と一生付き合っていくのですから、病氣になったからこそ気付いた多くの恵みに感謝し毎日を喜びのうちに過ごしたいと思います。すべての恵みに「ありがとう」を言って。

この思いを主が叶えてくださいますように！

佐木隆三『身分帳』（講談社文庫、平成2年）をよむ 直

『すばらしき世界』というタイトルで、きよねん映画化されたという。ご覧の方もおありかも。主人公の山川一（はじめ）を演じたのは役所広司だったらしい。大柄でドスの効いた声。だから山本五十六や阿南惟幾といった軍人があたり役。まわりを睥睨（へいげい）し威圧するが、そのくせ仕草のはしはしに可愛さがある。目を見てみると優しそうで、うぶなかんじ。好きであ

る。原作にピッタリの男優だろう。主人公は「ヤクザくずれ」だから。

誤って人を殺（あや）め、旭川刑務所で十年近い日々をおくる。出所後、平成2年に脳梗塞のため五十歳で亡くなるまで、山川が次々に体験する社会復帰の苦労をいっばうで語りながら、逆に恵まれなかった生い立ちについても最低限の情報を提供すると

いう作品である。未来むけと過去をさかのぼるといふ逆時間ベクトルが仲よく織りこんである。ただしその分だけ、ながい。

小説すれすれのドキュメンタリーが佐木隆三の持ち味だろう。緒形拳が天才的詐欺師を熱演した『復讐するは我にあり』がそうだった。「事実」だけを淡々と積みあげるようであり、実は作家の感情と解釈も見え隠れする。それを感じとるのが、佐木作品のおもしろさのひとつ。『身分帳』もそう。読みながら、作家のユーモアセンスを感じとって、思わず声を上げて笑いそうになることがあった。隣家の犬が夜中にしつこく吠える。こっちは寝られず体調不良になりそう。家まで押しかけるのはまずいと判断して電話する。すると「いきなり電話で失礼じゃないか」とのたまう。「失礼なのはどっちだ、東京のど真ん中で犬飼って、一晚中吠えさせるとは無神経だろ?」「泥棒よけの犬が吠えるのはあたりまえ」、ここまできて山川の本性むき出しとあいなる。「ふざけるんじゃないか。俺が泥棒みたいじゃないか。さっそく今夜から犬黙らせろ」、「あんた、会社から電話してるのか、なんというゴロツキ会社か知りたいね」と「(おれが)青酸カリ入りの肉だんごでも食わせてやろうか?」「……」気の短いことでは人後に落ちない山川である。一般社会との「マサツ」が切れのいい劇画タッチで繰り返される。たしかに「正論」を持ちだすのはヤクザくずれのほうなのだが、物も言いようで角が立つ。自分を取り巻く日常生活にスムーズに入りこむには、それなりのルールが必要で、社会的訓練が十分でない山川は、いつも損をしてストレスをため込んでしまう。

娑婆に溶け込めない山川の「失敗」について、その遠因を作家は彼の恵まれなかった生い立ちに求めているようである。海軍大佐の父は、博多芸者の母との間に生まれた彼を認知しなかった。敗戦の年、母は孤児院に彼をあずけて以後音信不通。山川は天涯孤独の身となり、さまざまな施設をたらいまわし、米軍筑紫キャンプの将校家族に里子として育てられたこともある。あとは

お決まりの道である。養子縁組は失敗をかさね、小学校卒業前後から非行を繰り返して警察の御厄介になる。四十歳を超えて出所後、自分のルーツを求めて母の消息を追うという彼の現在の行動は、母性愛に満たされなかった幼少年期の裏返しという、わたしたちの好きなテーマにふくらんでいる。

フラッシュバックのように紹介される主人公の生い立ちを読みすすむうち、わたしは昭和20~30年代前半の大阪駅前をおもいだしていた。車がすくなく、交通機関の主要市電が列をなして百貨店前にかたまっていたころである。現在の立派な駅前ビルではなく、薄暗くて、今から思えばなんだか怪しげな闇市のような姿をみせていた貧しい時代、食っていくのが精いっぱいだった終戦後間もない日本人の姿は、昭和61年に刑務所を後にして華やかな平成時代に放り出され、いま浦島よろしく、日々の糧を得るのに悪戦苦闘する主人公の姿とオーバーラップするようだ。精いっぱい生きるしかない山川一、本名田村義明氏のような人物はいつの時代にもいるということなのだろう。 合掌。

主日のミサの日程が 変更されます

土曜日

- ・7/16以降の主日のミサの
開始時刻は18時です。

日曜日

- ・7/17以降の主日のミサは
一回のみの開催となります。
- ・開始時刻は9時です。

宝塚黙想の家からのお知らせ

- 日帰り黙想会 10:00~15:30
7月12日(火) 指導:稲葉 善章 神父
7月28日(木) 指導:染野 治雄 神父
7月29日(金) 指導:山内 十束 神父
- 一泊黙想会
7月12日(火) 17:00 ~ 13日(水) 15:30
指導:稲葉 善章 神父
7月22日(金) 17:00 ~ 23日(土) 15:30
指導:染野 治雄 神父
- カトリック教会のカテキズム
第2・第4 水曜日 10:00 ~ 12:00
指導:染野 治雄 神父
- 聖地エルサレムを学ぶ
第3 木曜日 10時~12時
指導 笹田六合豊 修道士
- ギリシャ語で味わう聖書のことば
第1 火曜日 10時 ~ 12時,
指導 稲葉善章 神父
- 聖書の基本
第1・第3日 水曜日 10:00 ~ 12:00
指導:山内 十束 神父



上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

表紙の絵について

年間第16主日の7月16日には、ルカによる福音書の10章38~42節が朗読される。マルタとマリア姉妹の物語である。宣教の旅に出られたイエスとその一行をマルタは自分の家に迎え入れた。マルタはかいがいしくもてなしの準備をする。ふと見ると、マリアが主の足元に座りこみ、その話に聞き入っていた。当然、マルタはおもしろくない。イエスにマリアを叱ってください、と頼む。マルタの不満も当然のように思えるが、イエスはマルタに、人はそれぞれの価値観を持っており、その考えを尊重すべきだとお教えになった。マリアは宿泊の準備を整えるよりは、イエスの言

葉を聞き洩らさないほうを優先したのである。

そんな情景を描いたのが、ヨハネス・フェルメール(1632~1675)である。イエスの足元に座るマリアと、パンかごを手にイエスに語り掛けるマルタ、マルタを見てお答えになるイエスが大きく描かれている。人物は当時の風俗に合わせてある。わたしたちがよく知っているフェルメールの作品とはおもむきが異なるものの、3人の表情が巧みにとらえられた。

1654~1656年ころの油彩。エジンバラのナショナル美術館収蔵。

編集後記

故松本神父様の御父上、松本善一氏がこの4月にお亡くなりになったと、日生中央教会の広報誌から知り声も出なかった。

かつて、教会内に俳句同好会があり有志の方が『からしだね』へ投稿する企画があった。『からしだね俳壇』と称しそこに、松本神父様を通じてお父様を御紹介いただき、俳句をお願いしたところ快く引き受けてくださった。

また、個人的には『からしだね俳壇』の連絡担当のご縁から、御年賀状のやり取りを交わし今年もさせていただき身近な思いが一層つづいている。

息子さんの元へ旅立たれきつと、今の教会事情や世界情勢のことなどを、思う存分話しておられることでしょう。

訃報が続く、ご受難会のローナン神父様が帰国さきで帰天されたとのこと。思い出として、私も青年会時代があった。教会行事も様々としていた時で、“飲み会”も1つだった。飲み会にローナン神父様をお誘いし、夜にぎやかな梅田の居酒屋へご一緒に行った記憶がある。にっこり笑みを絶やさずお話されるのが、印象的な神父さまでした。

御二人の平安をお祈り申し上げます。

天使の微笑